

家庭生活に関する調査：高校生の家庭経済に関する意識調査

著者	沢井 泰子
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	16
ページ	69-84
発行年	1982
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001875/

家庭生活に関する調査

—— 高校生の家庭経済に関する意識調査 ——

An Investigation on Family Life

—— Report on Senior High School Students'
Consciousness of Their Domestic Economy ——

沢 井 泰 子

Taiko SAWAI

I は じ め に

高等学校の教科・家庭の科目「家庭一般」は女子必修であり、その目標は、¹⁾「衣食住及び保育などに関する基礎的・基本的な知識と技術を家庭経営の立場から、体験的・総合的に習得させ、家庭生活を合理的に営み、その充実向上を図る能力と実践的態度を育てる」となっている。

即ち高校では、管理面を重視することが明確に示され、生活領域である衣食住の管理のみでなく、家庭生活を総合的に管理する能力と態度を育てることが示されている。

家庭生活における人間（家族）・物資・金銭（家庭経済）・時間・労力（家事労働）等を有機的な関連において理解させ、家庭経営に役立つ総合的な経営能力を育てることが位置づけられているわけである。

従来、本道でも高等学校の教科・科目「家庭一般」の指導について研究は進められてきたが、家庭生活全体の調和を考える基礎になっている家庭経済の運営に視点をあてた指導法の研究は少ない。家庭生活の問題を中心に考える家庭科教育において、経済管理の問題は現代では最も重視されなければならないことであり、この面の指導体制の確立が急がれる。

また、学習指導要領では「家庭一般」の履修は、従来から女子必修科目とされ、男子が履修する位置づけはなかったが、昭和57年度から実施されている新学習指導要領では、第8節第3款の(3)に男子が選択して履修する場合の配慮事項が示されている。「家庭一般」4単位を全ての女子に必修という意図を考えると、男子が選択して履修する「家庭一般」の内容として、中学校の学習経験や日常生活の実態把握のもとに、適切な指導内容についての研究は、本道の高校の家庭科教師にとって大きな課題ではなからうか。

このことから、家庭経済に関する生徒の意識と実態を把握し、今後の指導上の基礎資料を得ることを目的として調査を実施したので考察を試みる。

Ⅱ 調査方法

1. 調査対象及び人員

調査対象は、高等学校全日制普通科（男・女）、工業科、家政科とし、男女別の数に大差がないようにし、対象生徒は全て2学年とした。調査人員は、総計1,575名（女子生徒数821名、男子生徒数754名）である。

2. 調査の時期

昭和57年3月中旬から下旬の期間で行った。

3. 調査用紙

家庭経済教育研究会作成²⁾の調査事項を用いた。

4. 調査方法

協力校に調査用紙を配布し、調査時間の設定はH.R.,または教科の時間を利用するなど学校の実情にそって調査するよう依頼した。

回収した調査用紙は、回答をマークシート方式でカードに記入し、コンピューターで処理を行った。

5. 処理の方法

集計は、男女別に行ない、それぞれの項目での百分率を図表化して考察した。

設問に対し、順位をつけずに二つ、または三つ回答する項目については、項目ごとに回答された総計をそれぞれ百分率で示した。

いくつかの観点から、項目間の関係をクロス集計して、考察を行った。この分については、実数で示した。

無回答については、それぞれの図表の最後に示した。

6. 協力校

表1 調査対象

学 科	普 通 科	工 業 科	家 政 科	計
調 査 校 数	6	2	5	13
調査生徒数（人）	803 (女子 416 男子 387)	男子 371	女子 401	1,575 (女子 821 男子 754)

Ⅲ 調査結果とその考察

1. 家庭環境

家族構成は、図1にみるように核家族は女子（82.2%）男子（83.6%）と予想を上回り、核家族化が一段と進んでいる。

母の仕事については、男女とも家事専従が多く、常勤18%については予想を下回った。外勤のパート、自営には男女の差が大きい。

図1 あなたの家の家族構成はどうなっていますか。

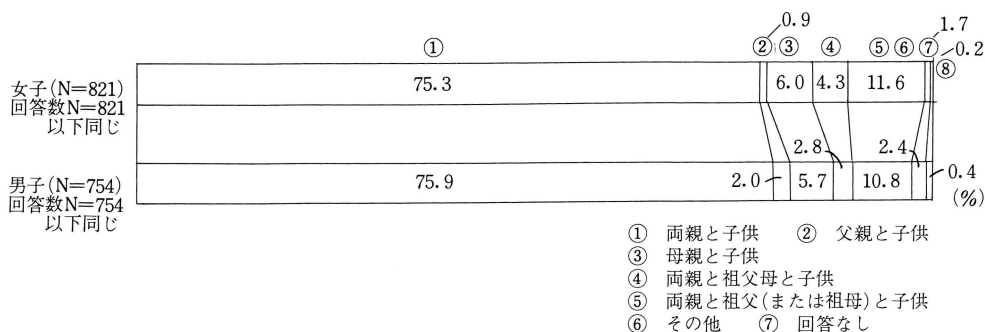


図2 お父さんの仕事についてお答え下さい。

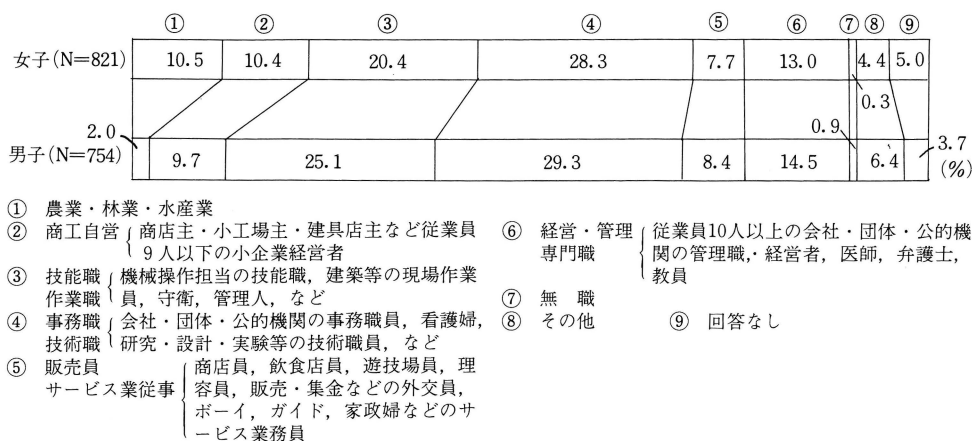
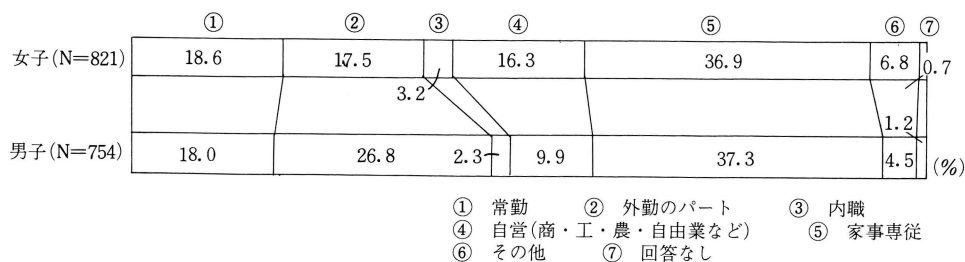


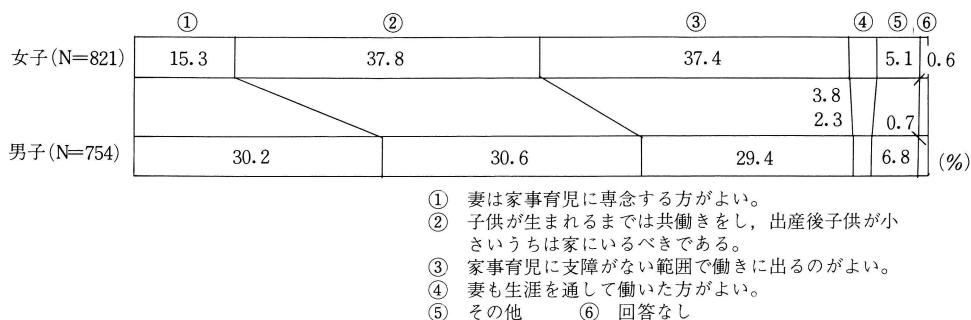
図3 お母さんの仕事についてお答え下さい。



2. 共働きについての意識

共働きについての意識では、図4にみられるように「妻は家事育児に専念する方がよい」について女子15.3%、男子30.2%と大きな差があり、また「妻も生涯を通して働いた方がよい」については、男女とも全体の割合は少ない。

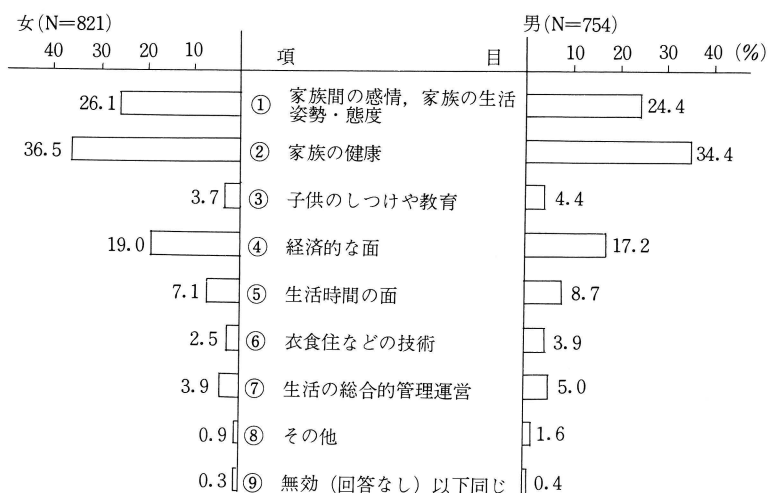
図4 あなたは夫婦共働きについてどのように考えていますか。



3. 生活の価値観

幸福な家庭生活のために、特に重要と思うものについて、順位をつけずに二つ選べたが、男女とも同じ傾向で「家族の健康」「家族間の感情、家族の生活姿勢・態度」「経済的な面」の項目を選んだものが多かった。

図5 幸福な家庭生活のために特に重要と思うもの二つ選ぶ



4. 家計の短期計画

図6は、現在ほしいものについての調査である。女子は「着る物」と答えたものが圧倒的に多く、男子は「趣味に関するもの」が最も多い。また、男女とも「その他」が10%以上もあり内容の推察が難しい。

図6 いま何がほしいと思いますか。

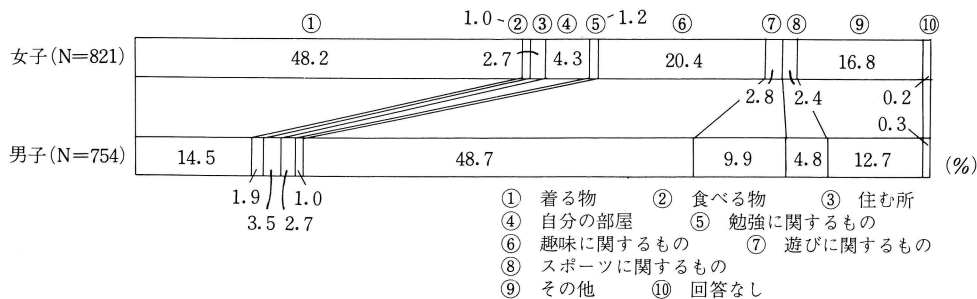


図7は、小遣いの額についての調査である。女子は小遣い額2,000円から5,000円未満の区分に回答したものが多く、男子は3,000円から6,000円未満の区分に回答したのが多かった。しかし、「わからない」と回答したのは男女とも意外に多かった。

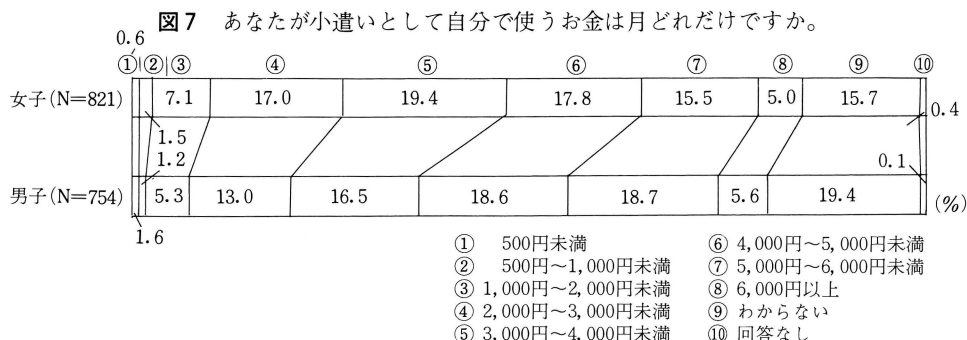


図8、図9は、小遣いの入手方法と使い方についての調査である。「家族から月毎に決めてもらうが、必要に応じてまたもらうことがある」は男女とも27%をしめている。一方、図9にみられるように、男女とも「小遣いの範囲内で思いついたものを買っている」が圧倒的に多く「いつも不足するので追加してもらう」と「いつも不足するのでアルバイトをして補っている」の合計が18%以上である状況から、小遣いの使い方について計画性がないことが示されている。

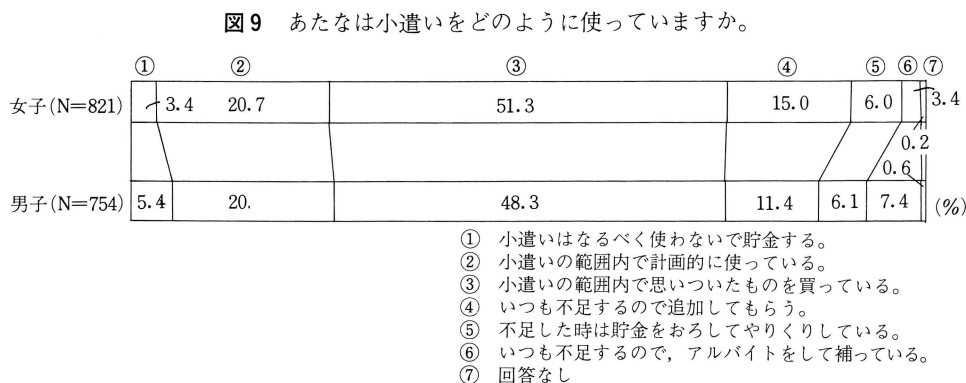
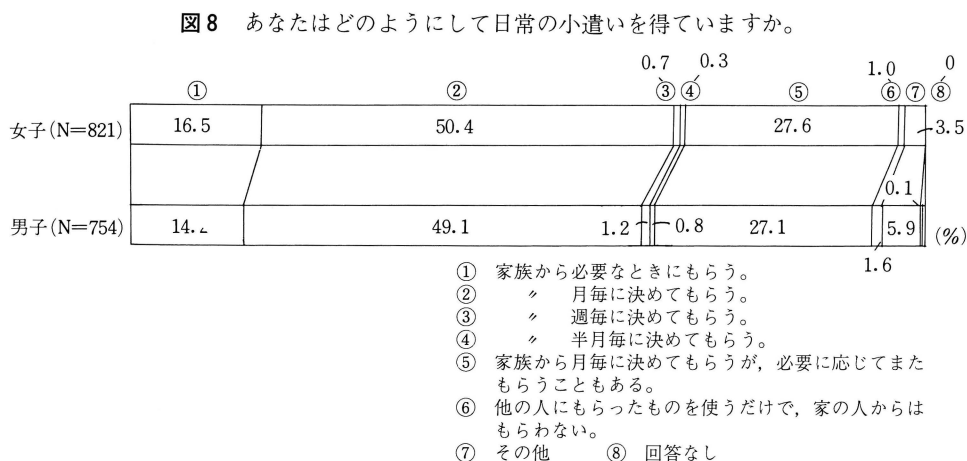


図10は、アルバイトについての調査である。未経験者は女子35.4%，男子24.6%と差がある。50,000円以上のアルバイト額と回答したのは、女子20.3%，男子39.9%である。

図10 自分で働いてお金を得た経験がありますが。あるという人は1年にどれだけ得ましたか。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
女子(N=821)	35.4	5.4	4.0	10.1	9.4	8.2	6.8	20.3	
									0.4
									0.8
男子(N=754)	24.6	4.1	4.0	6.1	5.7	8.2	6.6	39.9	

(%)

① ない
② 5,000円以下
③ 5,000円～10,000円未満
④ 10,000円～20,000円未満
⑤ 20,000円～30,000円未満
⑥ 30,000円～40,000円未満
⑦ 40,000円～50,000円未満
⑧ 50,000円以上
⑨ 回答なし

図11は、小遣い帳の記入についての調査である。「きちんとつけている」と回答したのは、女子11.3%，男子5.3%と低く、「一度もつけたことがない」の回答は、女子15.2%，男子44.2%であり、男女の差が大きい。

図11 あなたは小遣い帳をつけていますか。

	①	②	③	④	⑤
女子(N=821)	11.3	15.0	58.5	15.2	
					0
					0.4
男子(N=754)	5.3	5.2	44.9	44.2	

(%)

① きちんとつけている。
② 時々つけている。
③ かつてつけたことがある。
④ 1度もつけたことがない。
⑤ 回答なし

図12は、家計簿の記入についての調査である。「つけている。時々その内容をみて知っている」と「つけているが、その内容はみたことがない」の合計をみると、女子48.0%，男子48.6%であり、家計簿をつけている家庭は50%弱と推察される。「わからない」と回答したのは、女子より男子に多かった。

図12 あなたの家では家計簿をつけていますか。

	①	②	③	④	⑤
女子(N=821)	25.8	22.2	38.2	13.4	
					0.4
					0.4
男子(N=754)	17.2	31.4	28.9	22.1	

(%)

① つけている。時々その内容をみて知っている。
② つけているが、その内容をみたことはない。
③ つけていない。
④ わからない。
⑤ 回答なし

図13, 図14は, エンゲル係数にかかわる調査である。両図とも「わからない」の回答が男女半数近くあり, この項目についての認識度はかなり低い。

図13 成人男子について, 食物費として1ヶ月どれくらい使っているか知っていますか。

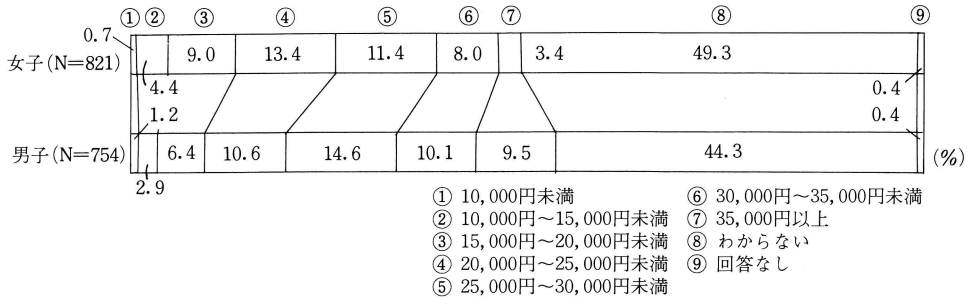


図14 日本の平均的な家庭のエンゲル係数(生活費に占める食物費の割合)はどれくらいだと思いますか。

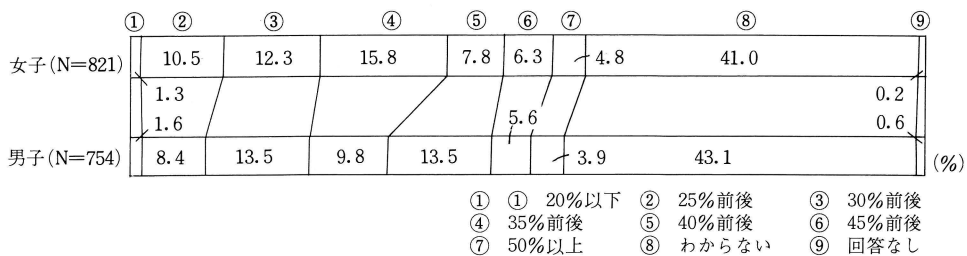
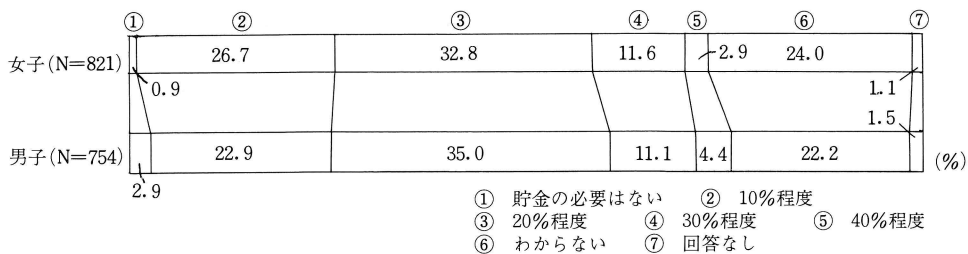


図15は, 貯蓄率の認識を調査したものである。各項目とも男女の差は余りない。「20%程度」とするものが最も多く, 次いで「10%程度」である。「わからない」の回答が男女とも20%台であり, その割合が高い。

図15 ボーナスを除く毎日の収入で貯金の割合はどの程度がよいと思いますか。



5. 家計の長期計画

図16は, 生活設計をするために, 特に重要だと思うものについて順位をつけずに三つ選ばせたが, 「健康」「お金」「家族」の項目を選んだものが最も多く, 男女の差はなかった。

図17は, 教育費が最も多くかかる時期の予想についての調査である。夫の年齢を「40歳前後」としたものが女子31.1%, 男子32.3%, 「45歳前後」としたのは女子41.8%, 男子39.5%であり, 男女の差は余りない。核家族化しているので「50歳前後」「55歳前後」としたのは極めて少ない。

図16 生活設計をするために、次のことがらについて特に重要だと思うものを三つ選ぶこと。

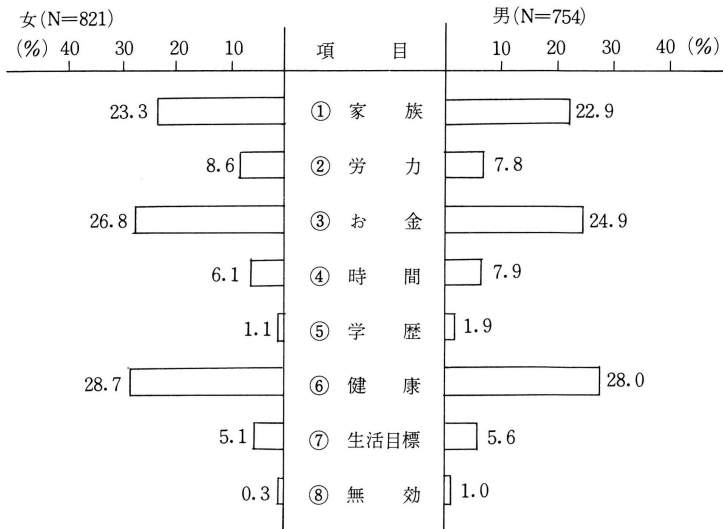


図17 教育費が最も多くかかるのはいつごろだと思いますか。

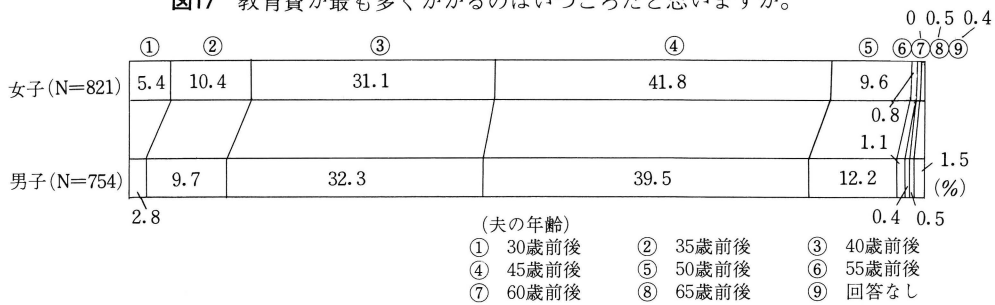


図18は、老後の生活費をどのように考えているかについての調査である。「老後の生活資金の貯蓄をしたり、保険に加入しておく」の回答は女子57.1%、男子44.0%である。「子供にめんどろをみてもらう」については、女子7.1%に対し、男子11.7%と男子の方が他者依存の傾向がみられる。

図18 あなたの老後の生活費はどのようにしたいと考えていますか。

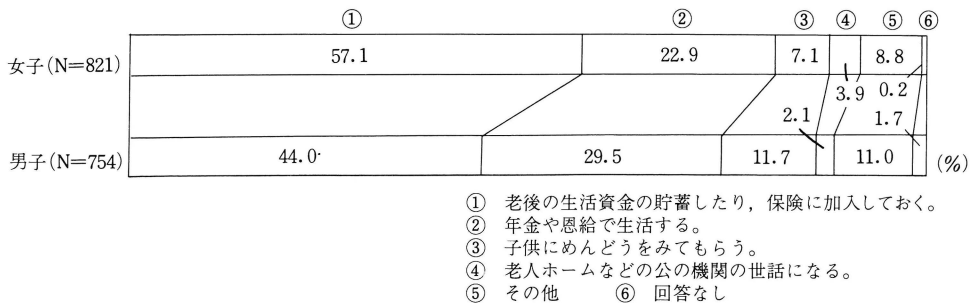


図19は、不時の災害に対する備えについての調査である。男女とも「保険」が圧倒的に多く
図20の結果をみても、保険は万一のときの費用と考えられている。

図19 不慮の事故に備えるために、次のどれがいちばん適当だと思いますか。

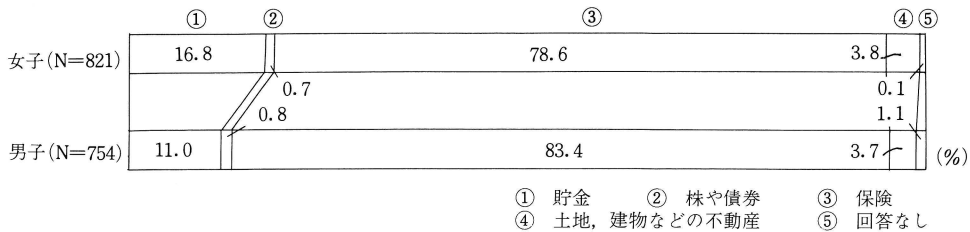


図20 生命保険は何のためにしますか

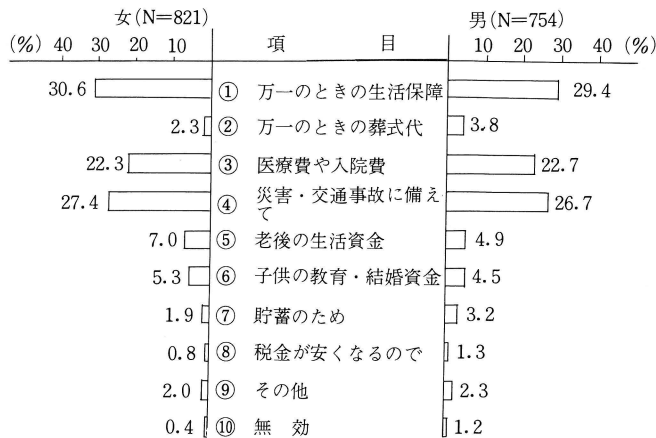
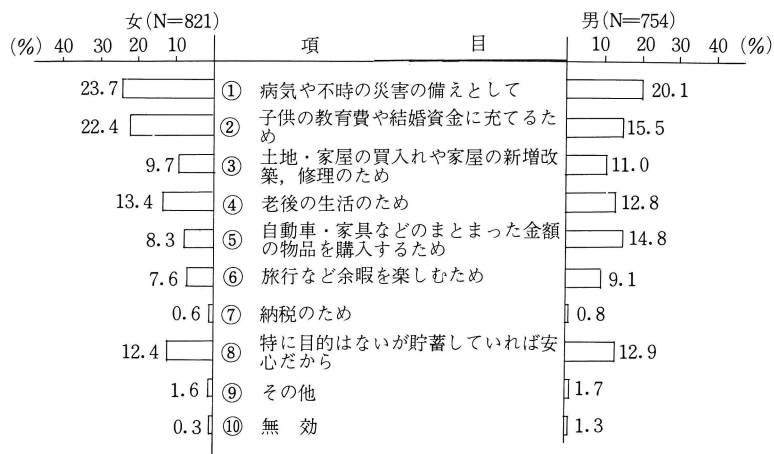


図21は、貯蓄の目的について、順位をつけず三つ選ばせたが、「病気や不時の災害の備えとして」が男女とも第1位である。第2位に多いのは「子供の教育費や結婚資金に充てるため」であるが、女子22.4%に対し男子15.5%と差があった。また、第三位に女子は「老後の生活のため」をあげているが、男子は「自動車、家具などのまとまった金額の物品を購入するため」と回答したのが多い。

図21 貯蓄は何のためにしますか。主な目的を三つ選ぶ。



6. 購入と消費

図22は、品物を購入する時、一番重視する事項についての調査である。「値段」と回答したのは女子26.3%，男子15.1%，「品質」と回答したのは女子19.4%，男子12.4%と男女に差があり，女子は品質より多少でも値段の安いものと目先きにとらわれた買物をする傾向がみられる。

図22 あなたが品物を購入する時，次のどれを一番重視して買いますか。

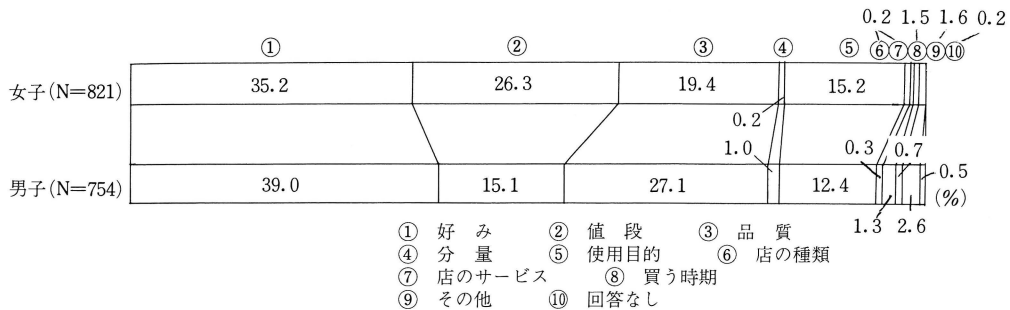


図23は，買物をするとき，何を参考にするかの調査である。各項目とも男女の差が現れている。特に「自分で調べる」については男子50%以上の高率であるのに対し，女子は27.6%である。女子は「家族や友だちの経験」の回答が多いことから，自分の判断のみで購入することは極めて弱い。また，「消費センターの情報」については，男女とも極めて低い回答であり，正しい情報を収集して活用することについては消極的である。

図23 物を買うときに何を参考にしていきますか

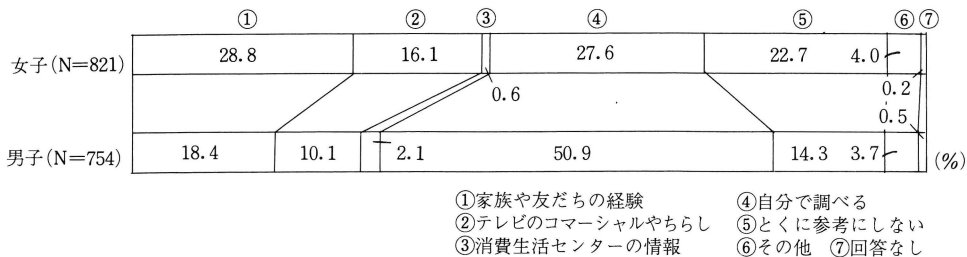
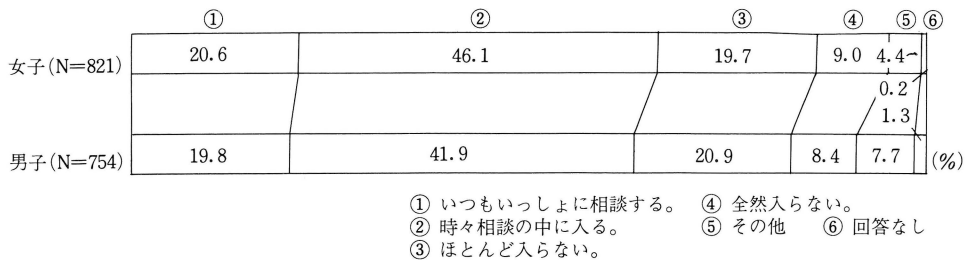


図24は，耐久消費財の購入の参加状況についての調査である。男女とも，各項目同じ傾向で「ほとんど入らない」と「全然入らない」の合計が女子28.7%，男子29.3%であり，家計運営への参加が少ない。

図24 あなたの家で耐久消費財を買う時，あなたは相談の中に入りますか。



7. 家庭科教育

図25、図26は、家庭科についての意識と興味についての調査である。家庭科の中で特に重要な領域として、男女とも「家庭経営」を第一位にあげ、次に「食生活」「保育」の順になっている。しかし、重要であるという意識とは別に、興味ある領域については、男女とも「食生活」を第一位にあげ、次に女子は「保育」「住生活」、男子は「家庭経営」「住生活」として、男女の特徴がみられる。

図25 家庭科の中で特に重要だと思うのはどの領域ですか。

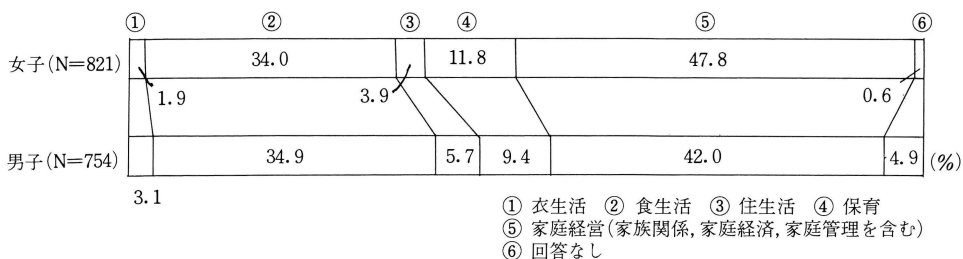
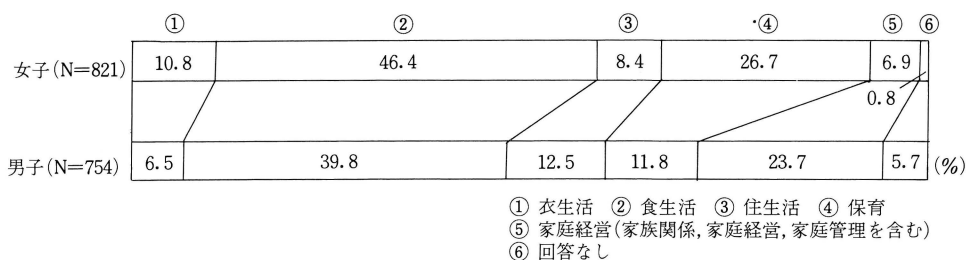


図26 家庭科の中で特に興味のある領域はどれですか。



Ⅳ 分析と考察

Ⅲでは、調査の結果を項目ごとに図表化し、男女別の全般的な傾向について述べたが、ここでは、調査項目間のかかわりについて意識を分析してみる。

1. 職業に対する意識

表2は、家族構成により、夫婦共働きについてどのような意識をもっているかの関連をみたものである。〈図1と図4の回答間のクロス。回答数は各項目とも標本数(1,575人)より回答なしを除いた実数である。—以下同じ扱い—

核家族(両親と子供, 父親又は母親と子供)と拡大家族(三世代家族)では、若干の違いがでている。核家族では、「子供が生まれるまでは共働きをし、子供が小さいうちは家にいるべきである」の回答数が多く、拡大家族では、「家事育児に支障のない範囲で働きに出るのがよい」と回答した数の方が上回っている。

表3は、母親の仕事と夫婦共働きについてどのような意識をもっているかの関連をみたものである。(図3と図4のクロス)

母親の仕事が常勤と外勤パートでは、「家事育児に支障がない範囲で働きに出るのがよい」

表2 家族構成による夫婦共働きへの意識

あなたは夫婦共働きについて、どのよう に考えていますか あなたの家の家庭構成は、どのよう になっていますか			妻がよい家事・育児に専念する方	子供は、家にいるべきである 子供が生まれるまでは、共働き	家事・育児に出るの がよい支障がない範囲で	妻も生涯を通して働いた方がよ	そ の 他
回答数 (人)							
両親と子供	1	186	272	413	397	35	69
父親と子供	22		3	6	10	1	2
母親と子供	92		25	37	25	1	4
両親と視父母と子供	56		10	15	24	4	3
両親と祖父(又は祖母)と子供	177		35	57	66	6	13
その他	32		8	15	7	0	2

表3 母親の仕事による夫婦共働きへの意識

あなたは夫婦共働きについて、どのよう に考えていますか お母さんの仕事についてお答え下さい。			妻がよい家事・育児に専念する方	子供は、家にいるべきである 子供が生まれるまでは、共働き	家事・育児に出るの がよい支障がない範囲で	妻も生涯を通して働いた方がよ	そ の 他
回答数 (人)							
常勤	289		40	93	126	11	19
外勤のパート	346		56	105	150	13	22
内職	43		8	19	13	2	1
自営	209		38	77	70	7	17
家事専従	583		185	214	140	13	31
その他	90		25	32	30	1	2

と回答した人は、それぞれ半数近くをしめているのに対し、母親が家事専従である場合、同じ項目については3分の1の回答を下回っている。また、家事専従は「妻は家事育児に専念する方がよい」については、3分の1近くの回答があるのに対し、常勤と外勤のパートでは、それぞれ回答が極めて少ない。

2. 小遣いについての意識

表4は、小遣い額と入手方法の関連をみたものである。(図7と図8のクロス)

小遣い額のそれぞれについて「家族から月毎に決めてもらう」が多い。小遣い額6,000円以

上の回答の中には「家族から月毎に決めてもらう」の割合は、他の小遣い額の人より多い。

表4 小遣い額と小遣いの入手方法との関連

あなたが 小遣いとし て自分で使う お金は月どれだ けですか	あなたは、どのよう にして、日常の小 遣いを得ていま すか	回 答 数 (人)	家族 から 必要 なと きま らう	家族 から 月毎 に決 めて もら う	家族 から 週毎 に決 めて もら う	家族 から 半月 毎に 決 めて もら う	必要 ある 家族 から 月毎 に決 めて もら うこ とが	他 け で 家 の 人 か ら は も ら わ な い だ の を 使 う だ	計
500 未 満		17	3	6	1	0	5	2	0
500～1,000 未満		21	4	11	0	0	4	0	2
1,000～2,000 未満		99	20	49	1	1	24	1	3
2,000～3,000 未満		237	30	144	2	0	53	2	6
3,000～4,000 未満		284	37	140	4	0	83	5	15
4,000～5,000 未満		286	49	140	1	3	82	1	10
5,000～6,000 未満		268	37	123	3	2	86	4	13
6,000 以 上		83	15	41	1	1	16	1	8
わ か ら な い		275	129	47	2	1	76	5	15

表5は、小遣いの使い方と小遣い帳の記入についての関連をみたものである。(図9と図11のクロス)

小遣いをどのように使っているかについての各項目とも、小遣い帳を「一度もつけたことがない」と回答した人が多い。特に「いつも不足するのでアルバイトをして補っている」と回答した人に、小遣い帳を「一度もつけたことがない」の回答が多かった。表4の結果を合わせて分析しても、金銭の管理面についての意識は極めて低い。

表6は、小遣いの入手方法と家庭での家計簿の記入についての関連をみたものである。(図8と図12のクロス)

小遣いの入手方法について回答の多い上位三つとも、家では家計簿を「つけていない」の数が多い。表5とのかかわりでみると、現在、自分達も小遣い帳の記入はしていないと回答した数が極めて多いことから、家庭の金銭管理の姿勢の影響ともみられる。

表7は、小遣いの使い方のかかわりから、品物を購入する時の判断と参考事項の関連をみたものである。(図22と図23のクロス)

品物を購入するとき。一番重視するものとして「好み」「品質」「値段」「使用目的」の上位四つをみても「自分で調べる」の回答が圧倒的に多いが、「とくに参考にしない」という回答も見逃すことはできない。消費者としての正しい判断で、自分で選択できる能力を養う指導について一層配慮の必要がある。

表5 小遣いの使い方と小遣帳の記入についての関連

あなたは小遣帳をつけていますか。		きちんとつけている	時々つけている	かつてつけたことがある	一度もつけたことがない
あなたは小遣いをどのように使っていますか	回数 (人)				
小遣いはなるべく使わないで貯金する	69	14	10	26	19
小遣いは範囲内で計画的に使っている	327	49	37	165	76
小遣いは範囲内で思いついたものを買っている	785	52	78	428	227
いつも不足するので追加してもらう	208	7	19	111	71
不足した時は貯金をおろしてやりくりする	95	6	10	57	22
いつも不足するのでアルバイトをして補っている	84	4	8	33	39

表6 小遣いの入手方法と家庭での家計簿の記入状況についての関連

		知っている 内容を見て	知らない つけていること	つけていない	わからない
	あなたの実では家計簿をつけていますか				
あなたはどのようにして日常の小遣いを得ていますか	回答数(人)				
家族から必要なときにもらう	242	39	53	106	44
家庭から毎月決めてもらう	782	175	229	247	131
家族から週毎に決めてもらう	14	2	6	3	3
家族から半月毎に決めてもらう	9	1	3	2	3
家族から月毎に決めてもらうが必要に応じてまたもらうことがある	430	109	104	144	73
他の人からもらったものを使うだけで家の人からはもらわない	21	5	4	6	6
その他	73	11	22	23	17

3. 家庭科に対する意識

表 8 は、家庭科で特に重要と思う領域への認識と実際の興味の関連をみたものである。

(図25と図26のクロス)

認識と興味が同じであると回答したのは、「衣生活」から「家庭経営」まで極めて少ない。重要な領域に「衣生活」「食生活」と回答した半数以上が興味ある領域に「衣生活」「食生活」と回答しているが、重要な領域に「保育」「住生活」をあげ、興味ある領域に「保育」「住生活」と回答したのは半数を下回っている。特に「家庭経営」を重要と回答し、興味の領域を「家庭経営」と回答したのは3分の1にとどまっている。

表7 購入する時の判断と参考事項との関連

(人)

あなたが品物を購入するとき、次のどれを一番重視して買いますか		何を参考にしてますか	家庭や友人の経験	テレビや雑誌のコーナー	消費生活センターの情報	自分で調べる	とくに参考にしていない	その他
回答数 (人)								
好み	581		132	74	6	217	132	20
値段	329		80	59	1	107	71	11
品質	363		85	41	6	179	45	7
分量	7		2	1	2	2	0	0
使用目的	219		64	25	2	83	39	6
店の種類	4		1	0	0	3	0	0
店のサービス	12		2	1	3	3	3	0
買う時期	17		4	4	1	6	1	1
その他	32		3	3	0	9	2	15

表8 家庭科の領域における認識と興味との関連

(人)

家庭科の中で特に興味のある領域はどれですか		衣	食	住	保	家庭経営
家庭科の中で特に重要だと思うのはどの領域ですか		生活	生活	生活	育	営
回答数 (人)						
衣生活	38	20	11	4	0	3
食生活	539	46	339	51	70	33
住生活	75	9	23	23	12	8
保 育	167	13	58	7	78	11
家庭経営	703	50	251	78	145	179

V お わ り に

以上、高校生を対象とした調査の結果を報告し、若干の考察を試みた。

調査対象者は、札幌市内が全体の3分の2、地方が3分の1という割合であったため、家族構成では核家族80%以上と予想を大幅に上回ったものと思われる。

家計の短期計画については、小遣いの使い方や家計への関心が薄く、思いつきで物品を買っている数が男女ともその割合が極めて高いのは、生活への計画性についての関心が薄いことを示している。エンゲル係数、貯蓄率など「わからない」とする数が多く、これらの認識度は、かなり低い。生徒は、個々の家庭の実態をどうとらえているのか、生活の実態把握がなくて家庭の経済生活への協力は生まれないのではないかと。

家計の長期計画については、生涯を通しての時間的把握や金銭的把握の認識度は低い。

購入と消費については、男子に比べ、女子の方が比較的安易な考えを持っている。消費者教

育は学校教育のみに課せられるものではないが、家庭科では教科内容とのかかわりが深く、多様な取り扱いができるので、生活の合理的な運営について、消費者としての実践的な学習の展開を工夫しなければならない。

家庭科教育においては、「領域名」についての認識と興味の調査であり、教科内容にはふれなかった。家庭経営領域の重要性を認めながらも、興味を示さないということは本道に限られたことではなく、全国的にも調査例が多い。

- 他領域に比べ実験・実習が少い。
- 教室内での一斉授業が多い。
- 内容が衣生活、食生活のように現在の自分の生活に直接的なものでない。

認識と興味が一致しない理由は、上記のようにいろいろな面から指摘されているが、興味深い領域としての教材研究を進めなければ、教科・科目「家庭一般」の目標「……家庭経営の立場から体験的・総合的に……」に即する指導に迫ることは難しいだろう。

生活の基盤である家庭の経済生活に関心と興味を高める指導のポイントをどこにおくか。また、生徒の学習意欲を喚起する教材研究の進め方などについて課題は多いのであるが、以上の調査の実態を生かし、今後家庭経済教育の在り方について研究を進めていきたい。

本調査に協力いただいた高等学校に心から謝意を表します。

文 献

- 1) 文部省：高等学校学習指導要領，文部省，1978
：高等学校学習指導要領解説（家庭編），文部省，1979
- 2) 家庭経済教育研究会：家庭科教育における家庭経済領域の整備に関する研究—高等学校編，
1980

(1982・8・31)